

あいだ

184

発行＝『あいだ』の会

月刊 2011年6月20日発行 1部360円



栃木県大田原市 photo. Akiba Sari

あいだ184号 目次

- 三陸の青い海への鎮魂と、船出へのエールを——東日本大震災の被災地に寄せる私の思い 山口勝弘 ……2
対談〈帝国〉の時代のアートとアーティスト（前） 白川昌生×小田マサノリ ……3
あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第82回 相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記（その3） 稲賀繁美 ……17
《書評》無限につづく隣接の運動、写真は世界の残骸に類似する。——『潮田文写真集 風に吹かれて』 金村修 ……23
《連載》戦時下日本の美術家たち（45） 美術文化協会（1） 1939～40年 転換期の前衛美術 飯野正仁 ……25

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第82回

相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記（その3）

稲賀 繁美

（いなが しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学）

【第3日 4月2日（土曜日）】

Session 411: New Visual Interfaces in Modern Japan: Art Magazines from 1900-1960 (Room 319A 7:30AM-9:30 AM)

開会日から数えてすでに4日目，そろそろ時差に加えて連日の過密日程の疲労が溜まる頃合だが，本日は早朝の7:30から「美術雑誌 1900年から1960年：近代日本の新たな視覚interface」に出席。ここでの討議者を承っての参加だったが，なにしろ早朝のこととて聴衆は十名もあるまい，というのが下馬評だった。discussantという役柄上，個別の論文の要約は省かせて頂き，当方のその場でのコメントを再録するに留めたい。

一番手のToshio Watanabe渡邊俊夫は大下藤次郎が1905年に発刊した水彩雑誌『みづゑ』を紹介したが，討論者私見によれば，水彩の流行も20世紀に入ってから絵葉書の公認による普及との相関として捉えることもできるだろう。日露戦争期で浮世絵版画は終焉を迎えたとされるが，その代替の位置を奪ったのが水彩と写真だった。発表者は水彩を英国趣味に結びつけたが，その背後には，油彩を至上とみなすフランス官展派の価値観との衝突があった。その典型となるのが，大下とも近い三宅克己と，フランス最後の歴史画家といわれたジャン＝ポー

ル・ローランスの衣鉢を継ぐ鹿子木孟郎とのあいだに展開された水彩画論争（1904）。山岳写生の流行の背景には志賀重昂の『日本風景論』（1894）の存在が無視できないが，志賀は詩人・野口米次郎の北米滞在のきっかけを作った人物でもあり，となればヨネの息子で環境芸術家としてのイサム・ノグチは，志賀が居なければ出現しなかったことにもなる。大下や志賀とも密接な関係にある山岳会の産みの親，小島烏水は銀行家だが，ラスキン協会会員にして初期の浮世絵版画研究家の顔も持ち，三宅の周囲からは台湾に水彩画教育を広めた石川欽一郎や，大正新版画の旗手として日本内地ばかりでなく朝鮮や満洲風物を描き一世を風靡した吉田博が登場する。すなわち水彩画の隆盛は帝国日本の進捗とも密接に絡まる出来事だったはずだ。また『みづゑ』への寄稿者網は盛岡の萬鐵五郎らを含むが，萬の生家は宮澤賢治の花巻盆地に面し，高村光太郎が戦後に隠遁した地でもあり，近隣からは美術批評家の森口多里のほか，国際連盟事務次長の新渡戸稲造や，前述の台湾民生長官で震災復興の後藤新平が出ている。

Julia Elisabeth Sapinは三越や高島屋の広告雑誌とその挿絵を研究しているが，呉服屋が百貨店へと脱皮して，その広告戦術が一新されたのも1900年のパリ万国博覧会以降と見てよかろう。三越が東京日本橋を



図1 大下藤次郎《穂高山の残雪》(明治40年?)

本拠に、杉浦非水らを起用して石版画ポスターに新風を吹き込んだなら、京阪を地盤とする高島屋は、意匠部に竹内栖鳳を採用する。後には第一回文化勲章受章の画家として知られる栖鳳だが、彼が京都市立画学校教諭時代に同僚となる横山大観は東京美術学校第一回卒業生。そこから判るように、同世代は欧風の学校制度によって形成された職業芸術家の第一世代と重なる。栖鳳の履歴も、最初から日本画家としての社会的地位が保障されていたとは言い難く、若き日の意匠部での図案の仕事が商業美術史上に果たした役割は、廣田孝の調査『高島屋「貿易部」美術染織作品の記録写真集』(京都女子大学研究叢刊47, 2009)が明らかにしたところだ。さらに『みづゑ』も活用した購読者寄稿によるinteractiveな双方向的協働は、百貨店の広告雑誌にも受け継がれ、東京銀座資生堂などはそれを巧みに利用して、震災後に全国的流通網を展開する。

金子牧が扱った戦時下の『写真文化』の前身となる『カメラ』の編集者には三宅克己の名もみえる。金子は写真家として『写真美術』で頭角を顕した土門拳に焦点を合わせたのが、ここには栖鳳を日本画家として把握するのに似た過去の合理化がないだろうか。日本橋三越と並んで東京銀座の顔となった資生堂の御曹司、福原信三は写真家としても著名だったが、その彼が推進したpictorealismに真っ向から対立した名取洋之助は、ドイツ滞在の末Berliner illustrierte Zeitungという戦前期では世界最大の写真雑誌に採用され、その編集工学を日本に伝

えた人物である。写真宣伝雑誌Nipponを、広告図案の草分け、山名文夫とともに率いたこの名取に見いだされ、短命に終わった彼の写真工房に加わりつつも、卓越した映像編集者たる名取を反面教師として藝術写真の市民権を切り拓いたのが、土門拳ではなかったか。その土門のプロ意識に対抗したアマチュア写真家たる帰朝藝術家が、50年代にヨネ・ノグチと前衛の覇を競った岡本太郎に他ならないが、彼の縄文土器や東北土着文化への開眼の背景には、戦前期のパリにおけるマルセル・モースの人類学への洗礼がある。岡本の古典古代の美的規範への反逆の裏には、ロマネスク美術を専攻した吉川逸治との交流も控えている。奇しくもこの同じ中世主義に啓示を受けロマネスク探訪に没頭したのが、名取洋之助の早すぎる晩年だった。そのほとりに盛岡の民俗研究に挺身した戦後の森口多里を置き、柳宗悦の息子にしてロマネスク研究者、柳宗玄を配してみれば、帝国日本民族学の視覚interfaceが敗戦後に成し遂げた展開の様も、単純な対立図式では割り切れない人脈の錯綜のうちに、部分的ながら復元できる



図2 杉浦非水 春の新柄陳列会、三越呉服店ポスター 1914年

はずだ。そのうえで名取に戻るならばどうだろう。彼の遺作となった『写真の読みかた』(1963)には、名取自身が戦後の人民中国に取材した経験と、『ライフ』誌が取材したハンガリー動乱報道写真の編集術に関する分析が収められている。組写真とキャプションの付け方次第で、映像は容易に正反対のメッセージを伝えうる。同一の写真が、組みと解説の按配次第で、人民中国の毀誉褒貶どちらにも用立てう

る。この教訓は、戦争協力者糾弾の単純な論調に、報道写真家名取が、無言のまま突きつけた反駁とはいえまいか。

震災のため紙上参加となったNoriko Murai村井則子は勅使河原蒼風の『いけばな藝術』を分析したが、敗戦後の前衛華道の展開も、イサム・ノグチ、岡本太郎、土門拳といった、分野を越えた相互浸透を当然とする知的雰囲気なかで培われた人的な網目のうえに築かれた運動に他ならない。一例にすぎまいが、丸亀在住の中川幸夫が、寄稿した生花の写真により1949年に作庭家、重森

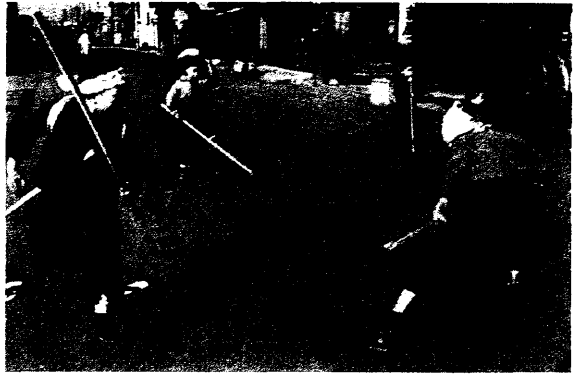


図4 土門拳《江東のこども・近藤勇と鞍馬天狗》1953年

三玲に見出された経緯ひとつにも、大下藤次郎の『みづゑ』の延長上で、家元機構の同人誌が発揮した文化的interfaceの効果のほどが確認できよう。1900年からほぼ半世紀にわたる日本の前衛的な図版雑誌の系譜が大雑把に鳥瞰され、熱心な質疑応答を堪能したが、ふと気づくと聴衆は五十名を超えていた。

Session 453: The Location of the Motif or How to Popularize Ideas (Room 318B 9:45 AM-11:45AM)

写真史研究の場合も、とかく研究者は現在の専門分野を当然の前提として議論を組み立てがちだ。しかし対象世界が同時代の宇宙のかなで編み上げていた情報網は、現在の専門分野の縦割りでは見えてこない。雑誌媒体研究の意味もそこにある。江戸時代後期の京都もその好例だろう。浮世絵版画や工藝それに歌舞伎舞台ではいかなる視覚言語が共有されていたのか。その題材のありかを探り、意匠の民衆伝播の様を復元する試みが、立命館大学の研究者たちから提唱された。Monika Bincsikがまず漆工藝の沿革と技法の変遷を要領よく紹介した。日常雑器として用いられた江戸期の漆器については、大名などの名品と違って実作例が多くは残存せず、むしろ当時の雛形を描いた出版物から復元のヒントが得られ、そこからは浮世絵のモチーフが多く漆器の絵付けに共有されていた実相が判明してくる。



図3 『名取洋之助と日本工房』川崎市市民ミュージム、2006年

ついでAkihito TsukamotoがGISを駆使して江戸期の京都における漆工房の位置の変遷を復元した。18世紀には四条通北側の鴨川西側に集中していた工房が、19世紀に入ると四条通以南に移動しており、残存する製品の異同も加味すると、高級品から民衆需要への移行が想定されるという。生憎ここで別の用件が入り、残りの発表を聞くことは諦めたが、きわめて入念に準備された高水準のセッションだった。なお討論者に予定されていた玉蟲敏子氏は、残念ながら震災のため欠席されていた。

Session 513: Roundtable: Looking Back and Looking Forward: AAS and Asian Studies, 1960-2010 (Room 313C 4:00PM-6:00PM)

この日しか真珠湾の戦艦アリゾナ記念館を見学する時間が取れなかったため、午後最初のセッションは失敬した。戻って顔を出したのはAASを1960年から2010年と回顧し将来の方向を探ろうとする円卓会議（といっても円卓などは存在しないパネルだったが）。各分野の現役長老格を並べた格好だが、会場に入ると、皮切りのCarol Gluckの発言が終わるところだった。以下断片的なメモになるが、日本の政治学を専攻するJohn C. Campbellは戦後北米の地域研究と一般理論志向の社会科学との相性の悪さを指摘しつつも、敗戦後日本の社会科学が例外的に高度の発達を見せており、研究者同士の学術交流が促進されたことを回顧した。そのうえで、60年代のマリウス・ジャンセン流の構造主義的近代化パラダイムの普遍志向が、エズラ・ヴォーゲルのJapan as Nr. Oneに描かれるバブル経済が崩壊して以降、すっかり変質を遂げ、近年では地域限定の「文化研究」へと変貌した様を鳥瞰した。これは換言すれば、国際的通用性の低下ということだろう。

中国の人類学を専攻するJames L. Watsonは、自らを冷戦時代の学者と規定しつつ、当時は地域を問わず人類学関係のすべての業績を読む暇があったが、今日では専門化が過度に進行したため周囲に目配りができ

ない視野狭窄が進行していることを指摘し、同じ領域で仕事をしている歴史研究者と人類学者とのあいだの交流が乏しくなっている現状に危惧を表明した。これにはPauline Yuが孔子を引いて、AASも70歳になって己の欲するところを為して則を越えずとなればよいが、と冗談を挟みつつも、東洋学専攻だとアジア言語文化学科に入れられて社会科学からは排除され、反対に社会学者でアジア地域専攻だと就職がない、といった北米の学問市場の窮状を指摘する一方、多くのアジア諸国では自国以外の周辺国を対象とするアジア研究が存在しないことも、国際的な学術上の人材流動性を阻害する足枷となっていると分析した。思えば日本はアジア研究が発達しているアジアでは稀な学者大国とも言えようが、外への人文学術発信も微弱なうえに、日本国内の人文関係大学教育は圧倒的に日本語に依存しているから、日本国内の上級教職ポストは英語圏から見れば不在に等しい。外国人専門家でも日本では語学教師に身を躰すしかないのは、北米の多くのアジア言語文化で、外国からの参入者が、実際には出身地域の語学担当教師を勤めるしか就職口がない実情とも似通った話だろう。

Session 525: Cultural Movement (Individual Papers) (Room 304B 4:00PM-6:00PM)

このあたりで部屋を抜け出し、Gen Adachi足立元の黒曜会にかんする発表を覗きにゆく。大杉栄、山川均、堺利彦、辻潤、加藤一夫らの周囲にあったアナーキスト望月桂の遺品を、所有者の元で写真に収める僥倖を得た論者による、一次資料の紹介だった。藝術の民主主義を唱え、エリート前衛主義を否認し、老荘や虚無を共産主義とも同居させ、白紙主義を唱える素人志向の天地無縫ぶりが、落書き同然の作品に透視される。本セッションは個別応募論文を集めたもので、フィリピン、タイやマレーシアのアナキズム運動を見直す発表も、並行して予告されていた。座長を依頼されたMats A. Karlssonの演題も、三十年代のナップ路線



図5 望月桂 (1886-1975)

下の日本のプロレタリア運動についてであり、予期しない凝縮力を秘めたセッションとなった。とはいえ、日本専門家以外は大杉栄が何者かもご存じでない。必要な前提の地均しをしないことには、お互いにせつかくの機会を生かすことも困難である。

Session 560: From Horseriders to Buddhist Devotees: China, Korea, and Japan at the Intersection of Visual Culture in the 5th-7th Centuries (Room 313C 6:15PM-8:15PM)

午前7時半から始まった長い一日は、まだ終わらない。「騎馬人から仏教帰依者まで」と題するセッションでは古代史に戻って中韓日の視覚文化交流が話題とされた。不思議なもので近世や近代の歴史であれば、いまや国籍など越えたtransnationalな議論

が楽にできるのに、そうした国民=国家の意識などなかったはずの古代史が話題となると、論じる側は突如、自分の国籍を意識し始める。Ho Tae Jeonは高句麗の遺跡の墳墓の浅浮き彫りを取り上げ、漢から流入した工人たちの技術や様式がいかに急速に変貌を遂げたかを力説。続くAkiko Walleyは法隆寺の仏師として名前が残る鞍造司馬の名を文献学的に考察して、馬具造りを職とする渡来人がやがて青銅鑄造技術を身につけ、仏師へと変身する過程で、司馬を名乗る外交担当下級官吏の家系と結合したとの仮説を展開した。さらにJunghee Leeは同じ斑鳩・法隆寺蔵の玉虫厨子の細部の図像を執拗に点検し、透彫りの技法や意匠の類似性から、厨子の金属部分の加工のみならず密陀絵の絵柄にある捨身飼虎の図を含め、現在の中国Liaoning遼寧省、慕容Murongの鮮卑族Xianbeiの墳墓をはじめとした遺品あるいは高句麗の作例と類比が可能であり、厨子はこれら高句麗や百済からの渡来人の手になり、当時の半島文化伝播の有様を示す作例、との説を主張した。

最後にYoun-mi Kimは慶州のKamunsa感恩寺にあるMunmu文武王の廟と見られる対の石塔について、精緻かつ大胆な仮説を展開してみせた。即ち近年の発掘で発見された舍利や遺構を考察すれば、『三国遺



図6 望月桂 失題 1920-22頃 (足立元「前衛芸術と社会思想」より)

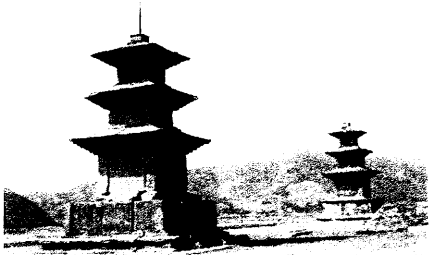


図7 史跡第31号, 感恩寺跡三層石塔(国宝第112号)

事』に残る, 東塔の基壇の下に溝が穿ってある, といった——従来, 誤記と片付けられてきた——特異な記載の意味が見えてくる。この溝は, 東塔の下に海からの龍を迎え入れる空隙として象徴的機能を帯びている。その一方, 東塔には飛ぶ鳥, 西塔には留まる鳥の意匠が置かれていることから, 先王の魂が西方浄土へと転生することが暗示されており, 西塔が須弥山を象っていることから, ここには仏教の浄土が仮託されている。かくして呪術的遺構(龍)と魂の

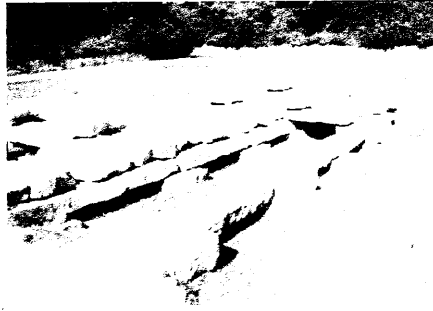


図8 慶州, 感恩寺 東塔基壇

転送(鳥)という「前密教的」要素が, 仏教的浄土の世界と複合を遂げる様が, ここに蘇る。三国統一を成し遂げた新羅第30代国王・文武王が未完のまま残した寺院は, 息子の神文王によってこのような複合的な意図を込めて混淆を成し遂げた, と見ることも可能ではないか。いささか曲藝技を見るような文献操作や再構成で, その当否を判断するだけの学識は, 当方にはない。だが著者の博士論文の一部をなす本論文は, 最近北米の学会で受賞対象となったという。

* なお, 前回も注記したが, 熱心な読者にはAAS-ICAS Joint Conference, Honolulu, Hawaiiのホームページ参照をお勧めしたい。(http://www.asian-studies.rrg/) 800件近いセッションの全ての論文の英文要約が参照可能であり, 以下の記事の参照番号と照合すれば, 筆者の見解と論文要約との関係や異同もご理解頂けるはずである。